

史実と物語の義経

義経は幼名を牛若丸（牛若）、鞍馬寺では遮那王^{しゃなおう}、成人になって正式名を源^{みなもとの}九郎^{くろう}判官^{ぼうがん}義経^{よしつね}と名乗ります。

源は姓、九郎は通称（義朝の九男の意味）、判官は官位が検非違使尉^{けびいしのじょう}だったことから、義経は諱^{いみな}（正式名）です。

ご存じのようにこの人は平家との戦いで華々しい手柄を立てますが、兄の源頼朝に嫌われて殺されます。

この義経は室町時代中期から江戸時代にかけて物語で語られ、能、人形浄瑠璃、歌舞伎などで演じられ、大変な人気者になります。今日も義経ものは当たり狂言、演目です。NHKの大河ドラマでも取り上げられました。

あまりにも人気が出、物語が更なる物語を生み脚色され、史実における実像の義経が分からなくなっていました。

本稿では史実と物語とを区別して義経はどんな人だったのか見てみることにします。

生まれは1159年（文治元年）で父親の義朝が平治の乱を起こし、平清盛に敗れた年です。義朝は翌年味方に殺され、兄の頼朝は伊豆に配流されました。義経2歳の時です。

義経は6歳の時に鞍馬寺（京都北方）に預けられました。

16歳の時に鞍馬寺を逃げ出し奥州の支配者藤原秀衡^{ひでひら}を頼って平泉に行き、平家から身を隠します。

兄頼朝が配流先の伊豆で平家に立ち上がります。

義経は兄頼朝の下に駆け付けます。

22歳（1180年 治承4）の時です。

これは史実です。

しかし鞍馬での期間、鞍馬からどのように脱出して平泉に行ったのか、平泉でどのように生活していたのかは全く分かりません。史実に残っていません。

頼朝に会って以降は鎌倉にいました。

鎌倉で3年たって25歳になった時です。

頼朝より木曾義仲追討で頼朝代官として京への出陣命令です。

ここから義経は歴史に現れます。1183年（寿永2年）です。

義仲追討に勝利、次に平家追討も頼朝の代官に任命され、一の谷合戦、屋島合戦、壇ノ浦の合戦に奇襲作戦が功を奏し圧倒的に勝利します。

都に凱旋します。京では貴族から民衆まで人気が沸騰します。

27歳でした。1185年です。

しかしここからがいけません。この年に頼朝に勘当され、鎌倉に戻れず、頼朝指令の暗殺実行に対抗して京で立ち上がります。

しかし兵が集まらず、京を去り西国に向かおうとして、大物浦（淀川河口）より出帆するも暴風で難破して和泉浦に戻されます。義経軍は解散です。

そこから吉野に逃げてさらに1年間の逃避行が続きます。

29歳の時に奥州平泉の藤原秀衡の元に逃げ込みます。

しかし秀衡が病没してしまいます。

そして新当主の^{やすひら}泰衡に殺されます。31歳の生涯でした。

これは史実です。

しかし頼朝より逃亡した28歳から平泉で殺される31歳までの具体的な様子、活動は何も残っていません

要するに義経の活動記録は幼年期から奥州時代（22歳まで）、頼朝に追われた時期（28歳から殺される31歳）の間は空白なのです。

25～27歳の頼朝の代官としての戦いの活躍の様子は史実として残っているだけです。

それ故に後世の作家がこの空白の部分を自由自在に物語にします。

義経悲劇の人“判官びいき”は江戸時代に絶好調になります。

それでは史実は何によるものかと言いますと、鎌倉幕府の公式の記録「吾妻^{あずま}鏡」^{かがみ}と関白九条兼実の日記「玉葉^{ぎよくよう}」となります。

義経が主役の記録ではありませんので断片的に記述があるだけです。

物語の方です。

先ず平治物語です。

作者不詳で鎌倉時代中期の作の軍記物語です。義経や頼朝のお父さんの義朝

と平清盛の戦いが内容です。義経と母親の常盤とぎわのことも記述されています。

次に平家物語です。作者不詳で、同じく鎌倉時代の中期の作ですが、平治物語の後でしょう。平家の栄華、源平の戦いより平家滅亡までの内容です。

物語ですが、事実もかなりの記述があります。歴史的物語と言っています。

源平盛衰記にも記述があります。源平盛衰記は平家物語を増訂されたもので、更にお話の部分が多くなります。

次に義経ぎけいき記です。室町時代の初期から中期の作と言われ、これも作者不詳です。上記平治物語、平家物語、源平盛衰記をたたき台にしているといわれています。

義経を主人公にした物語の初出です。

鞍馬時代、鞍馬から奥州への道中、頼朝から追われ京から大物浦、吉野それから奥州への逃避行の内容を弁慶を副主人公にしての詳細の物語です。

これが人気を博しました。

これ以降現在までの義経作品のすべてはこれを基にして作られました。

この作品を基に能では船弁慶（大物浦での遭難に平家の亡霊が出現）、安宅（安宅の関で弁慶の活躍）が有名ですね。

更に歌舞伎でも取り入れられ、勧進帳（安宅の関での弁慶の活躍）、義経千本桜（義経逃亡中、実は生きていた平家武将たちとの悲劇）があります。

人形浄瑠璃では義経千本桜が上演されます。

何せ史実では明らかに出来ませんので、観客が好むように物語を作り上げることができます。

勧進帳の安宅の関の場面は、義経記の愛発あらかちの関、安宅、如意の渡しの話のアレンジしたものです。

それでは義経記での物語義経を少しだけ見てみましょう。

鞍馬から奥州へ逃げる道案内をする吉次きちじでできます。奥州との金の取引商人です。架空の人物です。

途中で伊勢三郎と知り合い終生の家来にします。史実でも家来として出てきます。泥棒上がりと言われていました。

奥州の藤原秀衡ひでひらの元に行った後又京にいったん戻ります。そこであの弁慶と知り合い家来にします。五条と清水で出会いますが、この話が後世の話では

五条大橋での打ちあい話になっていきます。

京にいったん戻った話や弁慶で京で出会った話ほうそか本当か分かりませんが、弁慶が義経の家来にいたことは史実でしょう。

頼朝が平家に決起した時に義経に武蔵坊弁慶、伊勢三郎と共に佐藤三郎・四郎兄弟が家来として従いますが、史実では佐藤兄弟は藤原秀衡の家来です。

数少ない義経の家来は義経のために死にます。

義経は頼朝に反乱しますが、兵が集まらず、京から大物浦、吉野、大和へ逃げます。ここらあたりは史実ですが、その後奥州平泉までの逃避行はまったく空白です。

義経記には大物浦での平家亡霊の話はありません。

^{しずか}静が吉野で捕まり、鎌倉に護送され、男の子を生み、その子を殺され、京に戻された話は義経記にもありますが、史実です。

勧進帳の安宅の関の話の元ネタも詳しく語っています。

義経、弁慶の山伏に変装した一行は愛発の関^{あらかし}（福井県敦賀市）、安宅の渡り（石川県小松市）、如意の渡し（富山県高岡市）で怪しまれ詰問されます。如意の渡しでは弁慶が義経を打ちます。これが勧進帳では安宅の関にまとめられました。

この両場面は史実にはありません。

尚、義経記には木曾義仲追討、一の谷合戦、屋島合戦、壇の浦合戦の様子の記述はありません。

義経は合戦の様子を詳しく書いた平家物語も面白いのですが、まったく史実がない空白の時期を書いた義経記、それから派生した能、歌舞伎、人形浄瑠璃に人気があります。

それでは最後に義経の容姿です。

義経記では背低く、色白で出っ歯と記しています。肖像を添付しますが、江戸時代の作です。

以上

2024年2月14日

梅 一声

中尊寺所蔵 江戸時代の作

